令和５年度　なんかん米　ゆきん子舞　栽培暦

１等米比率95%、収量660kg/10aの米づくり！

JAえちご中越

生育指標

4月　5　10　15　20　25　5月　5　10　15　20　25　6月　5　10　15　20　25　7月　5　10　15　20　25　8月　5　10　15　20　25　9月　5　10　15　20　25

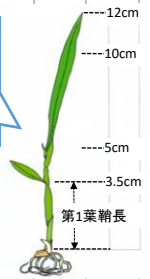
浸種開始
4月3日頃

催　芽
4月13日頃

播　種
4月15日頃

育　苗

【健苗を植えよう！】
・苗規格：2.0葉苗（稚苗）
・植込本数：3～4本植え



田 植 え
5月5日頃（5月上旬までに）

【中干し開始のめやす】
目標穂数の80%
⇒茎数336本/㎡
・60株植：19本/株

中干し・溝切り
6月10日頃

1回目穂肥
7月1日頃（出穂前25～23日）

2回目穂肥 7月10日頃（出穂前14日）

草刈りウィーク

草刈りウィーク

【適期収穫のめやす】
・積算温度：950℃～1,000℃
・籾の黄化率：85～90%

目標穂数420本/㎡

	田植え	中干し・溝切り	1回目穂肥	2回目穂肥	適期収穫
茎数(本/㎡)	72	335	620	560	450	420
草丈(cm)	12	27	57	68	83	85
葉数(枚)	2.0	7.5	9.8	10.8	12.0	13.0
葉色(SPAD)			41	39	37	36

出穂期頃まで葉色SPAD値36以上維持

・高温下で長期間の湛水は根腐れにつながるため適宜水を更新する
・フェーンが予想されるときはあらかじめ湛水する

収量構成要素めやす

一穂籾数	80粒
穂数	420本/㎡
㎡籾数	33,600粒/㎡
登熟歩合	90%
千粒重	22.0g
収量	660kg/10a

水管理

5 (cm)
4
3
0

田植え後1か月頃をめやすに中干し開始
遅くとも出穂前1か月までに終了
小ヒビが入る程度まで

中干し終了後は 飽水管理を継続！
出穂期前後の水分不足に注意

最終かん水日は 出穂25日以降

耕起・代かき　やや深水　活着後、やや浅水　中干し期間　浅水の間断灌水　1回目穂肥を機に飽水管理へ移行　最終かん水は十分に湛水

生育ステージ

○**最高分げつ期**（6月25日頃）　○**出穂期**（7月25日頃）　○**成熟期**（9月1日頃）
○**幼穂形成期**（7月2日頃）

作業のポイント

① 作土の確保・土づくり
・**けい酸質を中心とした土づくり資材の施用で登熟力の高い稲づくり！**堆肥等有機物活用で地力増進！
・作土深15cmの確保。極端に耕深が浅いと根が張らず倒伏のもとになり、高温に弱くなる。

② 基肥量のめやすと田植え
・基肥量は**分施の場合**、窒素成分で**7kg/10a**、**基肥一発肥料の場合**、窒素成分で**13kg/10a**をめやすとする。倒伏防止のため、地力の高い圃場や大豆跡では減肥する。
・茎数確保のため、**田植えは5月上旬まで**に行い、栽植密度は**坪60株セット**で移植する。
・育苗日数25日以内の田植えと田植え４～５日前のべんとう肥施用によって適正茎数で、太い茎を作り、充実の良い穂をつける。

③ 中干し・溝切り（適期生育調節）
・中干し、溝切りは田植え後1か月頃に開始し、根域を狭めないよう出穂前1か月までに終了する。

④ 後期栄養（中干し後の水管理と穂肥）
・中干し以降は土壌水分を保つ水管理で根の活力を保ち、土壌からの養分供給を図る。
・幼穂形成期に生育診断(草丈、葉色、幼穂を確認)して穂肥を施用する。**1回目の施用時期は遅れないよう注意。**
・穂肥の施用量は、1回目3kg、2回目3kgを基本とし、生育がめやすを大幅に超える場合は施肥量を控える。
・出穂期頃までは葉色（SPAD値）36以上に保つ。基肥一発肥料の場合でも生育状況から判断して追肥する。

⑤ 病害虫防除 《ふ割れが発生し易いので、斑点米カメムシ対策をしっかり行いましょう！》

斑点米発生防止対策：	・5月下旬から雑草が結実しない間隔で除草し、地域の一斉草刈を6月中下旬と7月中下旬に実施する。 ・水田内のヒエ、ホタルイの出穂はカメムシ類を誘引するので除去する。 ・カメムシ類の発生状況に応じて適期に薬剤防除を行う。
病害対策：	・葉いもち防除は、育苗箱施用により必ず行う。葉いもちの発生を確認したら、すみやかに薬剤防除を行う。穂いもち防除は予防防除を行う。 ・前年、紋枯病が多発生した圃場では確実に防除を行う。

穂肥施用1回目頃の生育

幼穂	0.1～0.2cm
草丈	65～70cm
茎数	31本/株(60株植)
葉数	10.8葉
葉色	SPAD値39

⑥ 適期収穫・乾燥調製
・積算温度から概ねの収穫期を推定し、収穫期が近くなったら、圃場ごとに籾黄化率を確認し適期収穫！
・ゆきん子舞は穂発芽し易いので、刈遅れないよう注意する。
・適正流量で籾混入や肌ズレ防止！機械設備の点検清掃で異品種混入防止！
・胴割粒発生防止のため、籾水分を把握し適正に乾燥する。